

生きている化石植物「フウ」の話

榎 井 尊

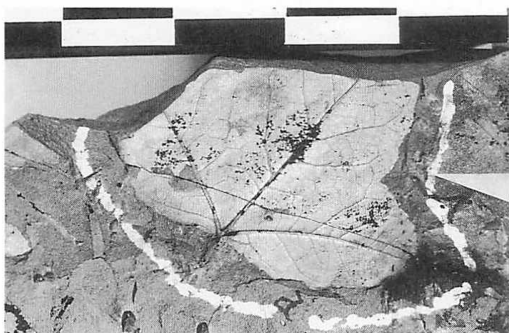
皆さんは、フウという植物を知っていますか？
今では中国・台湾とアメリカ東部などに生き残っている、日本では消滅してしまった種類でマンサク科に属しています。イチョウなどと同じく生きている化石と言えます。現在は比較的温暖な気候下に生育しています。最近は街路樹や公園樹としてあちこちで見られるようになりました。

フウの葉は、深く3つに裂けており葉の基部から3本の主脈が出ています。こうした特徴がカエデの仲間の葉に似ています。しかしカエデの仲間は枝から葉が対になって出のに対し、フウでは交互に出るので、見分けるのは簡単です。葉の縁のギザギサ（鋸歯と言います）に腺がある点でもカエデの仲間と区別できます。



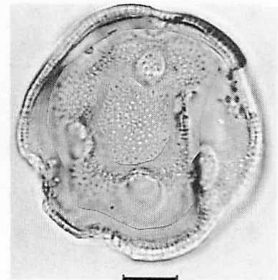
現在のフウ

フウは原産地の中国では「楓」と書きます。日本では「楓」はカエデの仲間にあてることが多いのですが、もともとマンサク科のフウをさす漢字なのです。江戸時代に中国から伝来しその誤りがわかったとされています。（ちなみにワープロで「かえで」と入力し漢字に変換すると「楓」と変換されます。おためしあれ）。



川本町産（鮮新世）フウの葉化石
（当館収蔵資料 スケールは2cm）

フウは新第三紀（2600～200万年前）の地層から葉の化石がよく見つかることで有名です。埼玉でも川本町の荒川の河原で葉の化石が見つかっています。写真の標本がそれですが、フウの特徴がよく残っています。



春日部市産フウ属の花粉化石
（関東平野中央部地質研究会
による スケール10ミクロン）

かつては日本に広く分布していたフウも、新第三紀が終わり氷河時代に入り地球が寒冷な気候に覆われると、次第に分布を狭め、ついには消滅していきました。そして比較的条件的よかった大陸東岸などに生き残ったのでしょう。このようなわけでフウは新第三紀を代表する植物化石のひとつと考えられてきました。

ところで、フウは葉や果実だけでなく、花粉の化石も発見されます。そして花粉の化石から、今まで考えられていたよりも新しい時代まで生き残っていた可能性が出てきました。1990年埼玉県が地盤沈下対策のための観測井を春日部市で掘りました。その時採取された地層を使って、花粉化石を調べました。すると、かなり浅い第四紀（200万年～現在）の地層から、たくさんフウの仲間の花粉化石が発見されたのです。地層は浅いほど新しいですから、今までの常識をくつがえす発見になるかも知れません。

沖縄では、古くても数万年前の低位段丘の地層から化石が見つかっています。フウが日本から消滅する過程でも、すぐに消滅したところと、あとまで頑張ったところと、さまざまだったというのが真相なのかもしれません。

文献

徳永重元・大森昌衛編. 古生物学各論 I 築地書館
井尻正二編. 大氷河時代. 東海大学出版会
北村四郎・村田 源共著. 原色日本植物図鑑木本編
(II) 保育社

（にれい たかし・学芸員）